

シンポジウム 10：施設看取り

演題名	認知症グループホームにおける看取り —関係性の中で育まれる物語の重要性—
-----	---

概要

日本認知症グループホーム協会の調査によるとグループホームの 3 割は看取りを経験しており、平成 22 年度 1 年間でのグループホーム内での看取りは退去者全体の 11.4%を占めるまでになっている。この背景としては、グループホームに対する入居者・家族・スタッフ等からの看とりへの高いニーズや意識、単なる介護施設ではなく、「第二のイエ」としての積極的な位置づけとなりつつあることが考えられる。

グループホームは、5～9 人の認知症を生きる人たちとスタッフと共に暮らす場である。認知症は関係性を強く求める病であると同時に、関係性を深める存在として、家族、地域、社会が失ってしまった大切な何かを照らし出す。だからこそ、それぞれの人生がとても鮮烈なかたちで姿を現し、人間と人間とが深い次元で出会える可能性に満ちた貴重な場でもある、と感じる。

昨年 10 月、グループホームの全国大会テーマが「グループホームに学ぶ人間物語」であった。関係性の中で紡がれる個々の「物語」を発見し、語り継ぐことが新たな道を拓くことにつながるという思いからである。グループホームでは看取りに関しても「大切な人々との関係性の中で自身の願いや意志を表現できる」というスタンスである。しかし、スタッフには戸惑いもあることは事実である。看取り対応としての「いい方法」を求めるあまり、技術や管理、操作に終始し、人間に対する「まなざし」が消えれば、そうした体験は育まれることなく枯れてしまう。故に、グループホームの役割は、本人の人生史、好きなこと、想い等の物語的な情報を医療側等に家族と共に積極的に発信し続けることである。そこに徹底的にこだわるのが大切である。

一人ひとりの「いのち」をしっかりと受け止めるグループホームは、本人、家族、スタッフにとっての「居場所」となり得る。民俗学的に、グループホームは本人と家族の「和解」を促す場であると捉えられている。それらの関係性を修復・発展させ、「いのち」に触れる地域の拠点となり得るためには、丁寧に物語を創っていく覚悟が今、グループホームに求められている。